

# モンゴルを追い払い、中華帝国を回復した明

「回復中華」のスローガンを掲げて中華帝国が復活

元(P.64参照)では、北方の少数民族であるモンゴル人が多数民族の漢民族を支配する身分制度をとっていたが、宮廷内での権力争いや財政の窮乏による経済の混乱などから、漢民族の不満が高まった。

1351年、江南地方で紅巾の乱とよばれる大規模な農民反乱が起これ、元を打倒し、漢民族の王朝を復活させる動きが高まった。そのなかで、モンゴル人はモンゴル高原へ撤退し、68年、農民出身で紅巾の乱にも加わっていた朱元璋が「回復中華」を旗印に応天府(南京)を都として明を建てた。長い中国の王朝交替史のなかでも、農民から皇帝にのぼりつめた例は、ほかに漢の高祖があるくらいである。

洪武帝となった朱元璋は皇帝権力の強化を図り、行政府である六部を皇帝直属とし、科挙(P.52参照)を復活させた。また、民衆を民戸(農民)と軍戸(軍人)に分け、民戸は里甲制による徴税を実施し、軍戸は衛所制による兵制を敷いた。

対外政策を進めた永楽帝、その死後は北虜南倭に苦しむ

洪武帝の死後、実力で帝位を奪い取った永楽帝は、大運河を改修して豊かな江南と華北を結び、都を順天府(北京)に遷

した。また、数度にわたるモンゴル高原への遠征、ベトナム併合、鄭和の遠征など、積極的な外交を進めた。

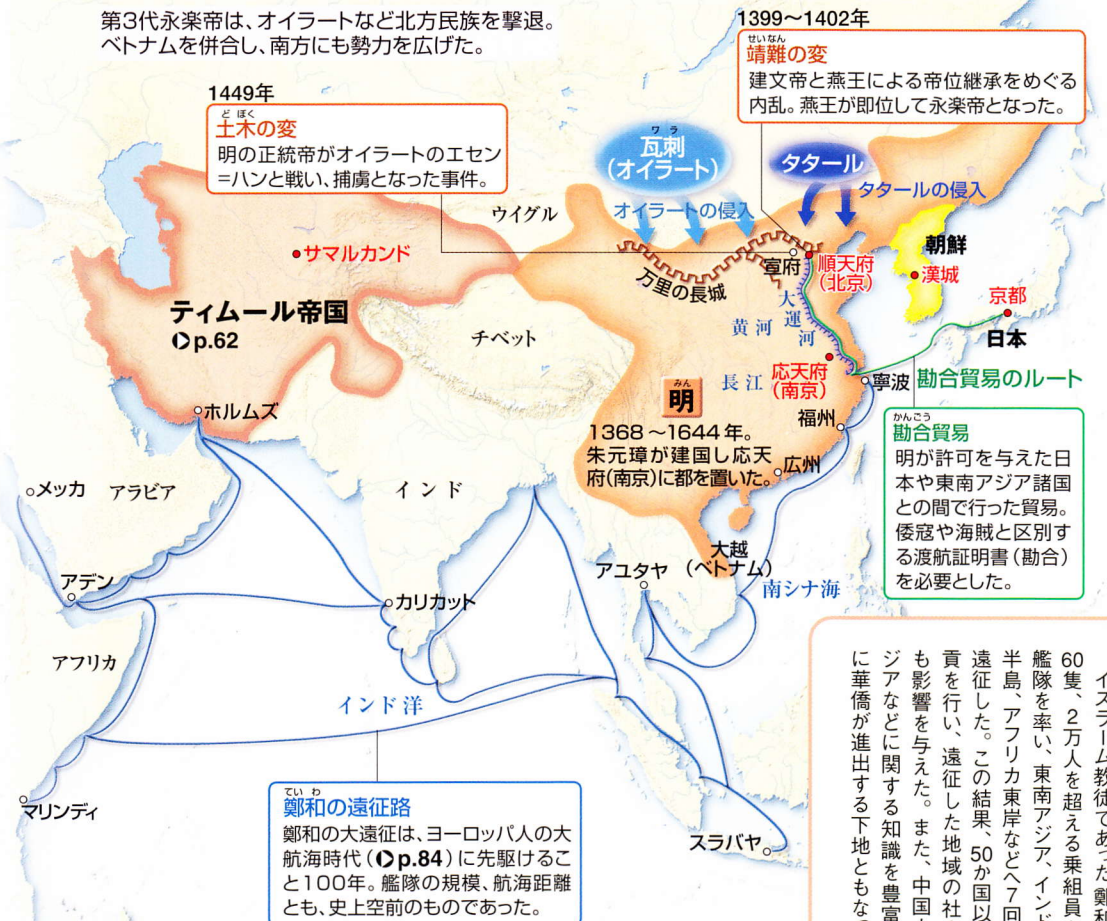
永楽帝の死後、北方のタタールやオイラートが勢力を回復し、華北を脅かす一方で、沿海部では中国人、日本人の私貿易商人による襲撃(後期倭寇)が頻発し、北虜南倭となつて明の体制を揺るがした。

明代には、農業をはじめ各種産業が発達し、貨幣経済が浸透した。銀の流通が進み、その影響で、税を銀納とする一条鞭法が普及した。これにより、銀の需要がますます高まり、メキシコや日本から銀が大量に輸入された。

また、漢人の文化が復興し、実践を重視する新しい思想として陽明学が生まれたほか、四大奇書とよばれる『水滸伝』『三国志演義』『西遊記』『金瓶梅』が完成した。

## 最盛期の明

第3代永楽帝は、オイラートなど北方民族を撃退。ベトナムを併合し、南方にも勢力を広げた。



1368年  
1644年

北方民族の支配に対し、漢民族復興の動きが高まり、明が建国。中華帝国が復活する。

華僑進出の下地となった鄭和の大遠征

15世紀初め、明の永楽帝は諸国に対して朝貢を求め、各地に宦官を派遣した。そのなかで最も規模の大きいものが鄭和による大遠征である。イスラーム教徒であった鄭和は、およそ60隻、2万人を超える乗組員からなる大艦隊を率い、東南アジア、インド、アラビア半島、アフリカ東岸などへ7回にわたって遠征した。この結果、50か国以上が明へ朝貢を行い、遠征した地域の社会、経済にも影響を与えた。また、中国人の東南アジアなどに関する知識を豊富にし、のちに華僑が進出する下地ともなった。

Key Word

### 紅巾の乱

元末期の1351~66年に起こった宗教的農民反乱。元の滅亡と明の成立の契機となった。氾濫した黄河の治水工事に徴用された人々を、秘密宗教結社である白蓮(びやくれん)教会の会首が組織した。反乱軍は白蓮・弥勒(みろく)教徒が中心で、赤い頭巾をかぶったことからこの名がついた。紅巾軍は一時、華北、華中に勢力を広げたが、やがて内紛で分裂した。